

# 園のおたより



第 5 号

令和 6 年 9 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

## 園長先生の夏休みのお願い

園長 関 由起子

夏休みに入る前の終業式の日、私はこどもたちに 2 つのお願いをしました。一つは、よく食べ、よく寝て、よく遊ぶ、二つ目はママパパ、おばあちゃんおじいちゃんを、時々ぎゅっと抱きしめて一言（ありがとう、大好きなど）を言うでした。9月の始業式に、このお願いについて尋ねたところ、みんな「できた！」と楽しそうに報告してくれました。

長い夏休みが終わり初めての登園日、ママパパとのお別れが悲しく泣いてしまう園児が多いかな、と思っていました。ところが、長い休みなどなかったように皆黙々と遊んでいるではないですか。1組さんの中にはぐずるお子さんもいましたが、すぐに慣れ、遊び出すように見えました。けれども、ところどころで、教員や実習生のお膝の上にいるこどもたちがいました。きっと、休み中にママパパ、おばあちゃんおじいちゃんのお膝の上で抱っこされたくさんの時間を過ごしたのかな、と微笑ましく感じました。

私の娘は私の膝の上が好きでした。あれは小学校 4 年生のころでしょうか、私はミニバスケットの練習を見学していたのですが、休憩中に娘が私のところに走ってきて膝の上に乗ったのです。まわりの保護者の方も少し驚いて「あら、〇〇ちゃん、ママのお膝ね」というと、娘は“しまった！”という顔をして走り去っていきました。この様子を同僚（大学教授）に伝えたところ、「息子は中 3 まで私の膝の上に座っていたけれど、ある日突然、座るのをやめたの。まるで、もうママの膝に座っている場合じゃないと気づいたように」と言いました。こどもを抱っこできる日々はあっという間に去っていくのかと思い、大切にしなければと思いました。

ここから少し悲しいお話になります。私はこどもを亡くされた方々との交流があるのですが、20歳の娘さんを亡くされたお母様が、「病院のベッドの上にいる娘が“ママ、だっこして”というのですが、“もう大きいのに、抱っこなの？ 病院だから難しいね”と言ってしまったのです。すぐに亡くなったのですが、抱っこしてやらなかったことを一生後悔しています」とお話しされました。親はこどもの年齢に関係なく、抱きしめる使命があると気づかされました。私の娘はすでに成人し、抱っこする機会はすっかりなくなってしまいましたが、いつかその日が来たら、躊躇せず抱っこしようと誓っています。みなさまもこどもを抱っこする機会を是非大切になさってください。園長からのお願いです。

## 「だって」

副園長 小谷 宜路

こどもたちの毎日の中には、大人から見ると「どうしてそうするの?」「何でこんなことをしているの?」と思うような場面にたくさん出くわします。大人の間いかけに、こどもたからは「だって〇〇しようと思ったから」「だって〇したかったから」「いま、〇〇しているところなの」と、応えが戻ってきます。「なるほどね」と納得できることもあれば、「そうは言ってもさあ・・・」「それはそうかも知れないけれど・・・」と返したくなる場合もあります。こどもたちがやろうとしていることに何らかの意味があることを理解したつもりでも、現実には、こちらにも別の「だって」の思いがあり、こどもの「だって」と真逆であることも生じます。

加藤繁美さん(山梨大学名誉教授)は、こどもの「おもしろさ」をテーマに、次のようなことを述べています。

遊びは、「おもしろさ」を追求する活動である。子どもは、遊びを通して発達する存在である。そしてそれゆえ、子どもは「おもしろさ」を追求する過程で、自分を発達させる存在である。子どもたちは決められた道から逸脱する場面に遭遇すると、とたんに「おもしろさ」のスイッチが入ってしまうのだが、そんな子どもたちの姿を保育者は素直に「おもしろがる」ことができないから問題は複雑なのである。「おもしろさ」にこだわり、「おもしろさ」を極めながら発達する子どもたちに、多くの「あきらめ」を要求していることに気付いていないから問題が深刻なのである。

※『幼児教育じほう』51巻1号・51巻3号(2023年)より

加藤さんの言葉を借りれば、こどもたちは常に「おもしろさ」の中に生きているように思います。大人の価値観からすると「おもしろくない」と見えることであっても、その人にとっては「おもしろさ」があるから、その行為になっているのだと思います。今この時を生きゆくこどもたちに対して、そばにいる大人が願いや期待をもって関わろうとすることは当然のことです。しかし、もしかしたら大人の願いや期待という名のもとに、せっかくの「おもしろさ」の世界をせばめたり、壊したりしてしまっているのかも知れない、そのようなことを改めて意識しながら関わっていきたいと感じます。こどもが元々もっている「おもしろさ」の世界があります。その人その人にとっての「おもしろさ」の世界に、ちょっとご一緒させてもらおうというような気持ちで、今この時を大切にしていきたいと思います。





## 1 くみ

### 「何にでもなれる」

2学期になり、「今日は〇〇がしたい」という思いが1学期の時よりさらにたくさん出てくるようになりました。

9月の三連休明けのある日、着替え終わるとすぐにお面バンドにシールを貼り付けて衣装を作り始める姿がありました。出来上がったものを頭に着けると、その瞬間に自分のなりたいものに変身してしまいます。ハートのボタンが付いた道具や魔法のステッキなど、その世界の中で必要な物をどんどん作っていきます。そんなわくわくしながら作る姿を見て周りにいた友達もその場に集まり、自分の変身道具を作り始めます。友達の作り方を真似て衣装を作ってみたり、自分なりにアレンジしながら新しい道具を作ってみたり、あっという間に1組にはたくさんの変身した姿の人が誕生しました。自分のなりたいものに変身したことで、「こんなふうにしたらもっと楽しくなる」という思いがこどもたちの中に生まれていったのだと思います。

その日から1組にはいろいろな人が現れるようになりました。「今日はね、プリンセスなんだよ」と小さな声で嬉しそうに教えてくれる人、猫になって友達と過ごす人、恐竜になって先生や友達を食べようとする人など、毎日、いろいろなものに変身しています。その時にこどもたちに話しかけてみると、「にゃー」と返事が返ってきたり、「ガオー」と食べられてしまったり、その子自身と話すことはできません。大人から見れば「なりきって遊んでいる」と見える姿も、こどもたちにとっては「そのものとして生きている」のだと改めて気付くことができました。

こどもたちの中には、不可能なことは何もなく、一人一人が自分の中に無限の可能性をもっているのだと感じます。大人が「そんなの無理だ」と思うようなことを当たり前に飛び越えてくるのが遊びの面白いところなのではないかと思います。こどもたちの「こんなものになりたい」を実現できるよう、これからも一緒に考え、楽しみながら過ごしていきたいと思えます。





## 2くみ

### 「どどんとせ」

2学期が始まった時に、「ばばばあちゃん うみのおまつり どどんとせ」という絵本を読みました。どどんとせってなんだろうという不思議な言葉から、いろいろなアイデアが出てきました。ある人が、「ヒューーードーんってなる花火がさ、ヒューーードどどんとせーってなるのかな」と言ったことで、次々と「ヒューーードどどんとせー！」と、打ち上げ花火のような身振りをしながら、勢いのある声をあげることが楽しくて、みんなで繰り返しました。

どどんとせとは、海でばばばあちゃんと動物たちが太鼓を叩いたりしていた時の唄だったのです。「よいよいよいのよ〜いとせ みんなでおどろろどどんとせ」という節があり、こどもたちは「このことだったのか」と満足げに絵本を見ていました。それからこどもたちは、余韻とともに「どどんとせ！」と声をあげたり、動いたりする姿がありました。賑やかとは、こういうことかと、私もじっくり味わいました。

翌日には、「昨日、どどんとせ〜って楽しかったね」と言う人がいました。すると、「どどんとせー」と、また勢いのある声が部屋中に響きます。そこで、大学の先生にお願いして、長胴太鼓と締め太鼓を附属小学校からお借りすることにしました。太鼓の音が空気に響くと、周りの人たちと分かち合い、いつのまにか気持ちが吸い寄せられるように響くところへ足が向き、呼吸がぴったりと合うようです。同時に大地に響くと、足元から身体の中に向かって元気をもらえる気がします。こどもたちは、土の中でモグラやミミズたちも踊っているんじゃないかと嬉しそうにしています。

興味のある人たちが盆踊りを始めると、保育室では焼きそば屋、たこ焼き屋、お面屋、かき氷屋ができました。そして、今は1組や3組と一緒に楽しめる一つとして太鼓を叩いたり、踊ったりしたりしています。こどもたちの満タンの「楽しい」が、溢れて広がっていくイメージでしょうか。相撲の立ち会いでは呼吸を合わせると言い、獣と戦う狩人は気配を消すと言うそうです。戦うのに、合わせるのは不思議ですが、ケンカと相撲には違いがありそうだと教えてもらったことがあります。

祭りは、一人ではできません。人が集まって、みんなで息を合わせて、楽しさを交換し合っているようです。これからどんな楽しいがあるのか、わくわくしています。



### 3 くみ

#### 「本気になること」

こどもたちは幼稚園の生活の中で、自分が夢中になれることに「本気」で取り組んでいます。今月はそんな3組の姿を紹介できればと思います。

遊びの中ではイメージした物や現象を形にするために「本気」になって創意工夫します。例えば、泥場近くで行われている川工事の遊びでは、ダムを作るためにはどうしたらいいか、勢いよく決壊させるにはどうしたらいいか、何度もやり方を変えたり道具を工夫したりしながら遊びを繰り返しています。室内の遊びでは、アイドルの衣装、古代生物の造形など、それぞれの「作りたい」を形にするためにデザインを描いたり、材料を選び取ったりしています。このように遊びの中でじっくりと「本気」になる姿もあるでしょう。

それとは別に、こどもたちが「本気」になる姿が見られる場面があります。少しずつ涼しさも感じる気候になってきて、戸外でのびのびと体を動かして遊ぶことも出来るようになってきました。最近取り組んでいるのが、追いかけ玉入れです。最初は一つのかごを使って2チームで順番に何個入るかやってみました。それからかごを増やして赤白に分かれて競い合うようにしてやってみました。2チームに分かれて互いのかごに入っている玉の数を意識しながら玉入れをすると、こどもたちの気持ちや取り組み方に大きな変化がありました。「最初にいっぱい掴んでから投げるといいんだよ」「練習してもっと入れられるようになりたい」など、「本気」になって取り組んだからこそ、勝ち負けを越えてまたやりたい気持ちが言葉になったのではないかと思います。

目の前のことと真剣に向き合う過程で、様々な気づきや物事に向かっていく姿につながっていくのではないのでしょうか。3組の後半の生活も「本気」になるこどもたちを支えていきたいと思います。

